

第12号の刊行によせて

留学生センターの現状と展望

平成16年4月から長崎大学は法人化されました。これを契機に、学内各組織は、これまで以上に教育・研究内容の自己評価、外部評価を行い、また、組織構成の適否を検討し、教育・研究の改善、効率化を計らなければなりません。そのためには、各組織の目標、理念を再確認する必要がある、これは即ちその組織の存在意義を確認することにもなります。この観点から留学生センターを俯瞰し、現状を紹介するとともに近未来を展望してみたいと思います。

既にご承知の方が多いとは思いますが、先ず、その歴史を簡単に記します。留学生センターは、1986年6月に学内措置で設けられた外国人留学生指導センターを前身とし、1996年5月に省令施設として設置されました。そのときの目的は、留学生に対する日本語教育の効果的な実施および留学生の教育研究上あるいは社会生活の適応上の悩みに関する指導等でありました。

以来10年近くが経ちますが、この間、留学生数は全学生数の2.5～2.7%で推移しておりました。一方、本学はその理念の一つに国際化を掲げ、これに呼応して各部局が努力された結果、諸外国大学との学術交流協定の締結数は年々増加の一途をたどり、現在（平成16年5月末）63校に上っております。これに応じて、留学生数も3～3.5%へと増加の兆しが見えております。全学生の何%が適正な留学生数かということについては一概にはいえませんが、一般に有力な大規模ならびに中堅総合大学は総学生数の5～10%の留学生を迎え入れており、そのために多大な努力をしております。長崎大学におきましても、大学教育・研究に及ぼす留学生の大きな効果・影響および諸外国への国際貢献の観点から、より多くの留学生を迎え入れる諸施策を採ろうとする方向に向かっております。既に、工学部を中心とした日韓理工学部留学生、環境科学部の留学生の定員化等が実施されておりますが、質の高い留学生の一層の参入には、留学しやすい環境を、大学側がより一層整備する必要があるとの考えのもとに、今秋から短期留学プログラム（以下、短プロ）、また、オランダのライデン大学の学部学生向けの日本語コースの短プロを始める予定です。短プロは、1年未満の短期間にワンコースを修了でき、古くから欧米各国で活

発に行われており、最近では日本でも30数校で実施されている効果的なプログラムです。予定している短プロの内、後者は留学生センターが主体で行う短プロですが、前者は全学の支援体制で行う英語による授業から成り立っており、この実施・推進のための教員の配置も決定されております。

これらのプログラムは学部学生対象であります、大学院における留学生増も計る必要があります。そのためには、英語による講義でなりたっているコースが必要であり、文部科学省もこれを推奨しております。大学院医歯薬学総合研究科ではその博士前期課程（修士課程）に特別コースを設置し、これも今秋から始まる予定です。大学院における留学生増加施策は始まったばかりですが、近未来には同様の英語による大学院特別コースがいくつもの各専攻で行われると予想されます。

このように増加する留学生（中期的には私見ですが留学生数5%）に対する修学・生活指導、日本語教育などで、留学生センターへの期待が益々大きくなると予想され、その存在意義は今後一層増すものと思われれます。

一方、海外への留学生はまだ非常に少ないのが現状です。その原因には、まず単位認定問題の問題があり、この解決には各学部の協力・理解が必須です。また、日本人学生への広報が十分でないことも原因のひとつであろうということで、留学生センター、留学生課が中心になって、例えば2003年秋から海外留学セミナー等を開いておりますが、今後もこのような試みをより多く推進する必要があります。

以上、留学生受け入れを中心として、留学生センターの現状と近未来の展望を記しました。

平成16年5月

留学生センター長 松村 功啓